

## — 目次 —

1. 第 2 期対応の稼働状況（概要）
  2. 第 2 期対応によるリスク削減効果
  3. 大口内為取引の決済進捗
  4. 今後の検討課題
  5. 照会先
- 〈参考〉次世代 RTGS 関連資料

## 1. 第 2 期対応の稼働状況（概要）

次世代 RTGS プロジェクト第 2 期対応（1 件 1 億円以上の大口内国為替取引の RTGS 化）は、予定どおり、2011 年 11 月 14 日に稼働を開始しました。これにより、大口資金決済の全てが RTGS により処理されることになりました（BOX1 参照）。

この間、第 6 次全銀システムを始めとする各種システム開発や総合運転試験等への参加、第 2 期対応後の決済ルールを含む運用面の検討など、関係者の多大なご協力の下で、プロジェクトを円滑に運営することができました。

稼働開始以降、日銀ネットおよび全銀システムは、繁忙日を含めて安定稼働を続けています。また、事務面に関しても、金融機関等から特段問題は報告されていません。こうした下で、第 2 期対応後の当座勘定（同時決済口）における決済は、日々円滑に行われています。

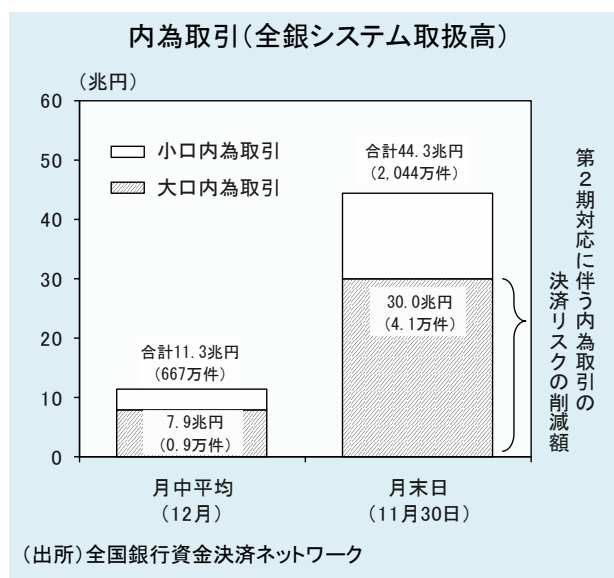
## 2. 第 2 期対応によるリスク削減効果

## (1) 大口内為取引の決済リスク削減

1 営業日平均でみると、全ての内為取引の取扱高 11.3 兆円（2011 年 12 月の月中平均）のうち、大口分は 7.9 兆円であり、第 2 期対応に伴い、全体の約 7 割が RTGS 化され、決済の安全性が向上したことになります。

また、内為取引が集中する傾向にある月末日についても、2011 年 11 月末日では、内為取引の取扱高 44.3 兆円のうち、大口分は 30.0 兆円であり、約 7 割が RTGS により処理されました。

リスク管理の観点からは、内為制度全体だけでなく、個々の銀行が抱える決済債務、特にその最大額の変化も重要です。そこで、個々の銀行が内為取引を通じて負担する（グロスの）債務の最大額の変化を確認すると、第 2 期対応前（2010 年 12 月の月中平均）では 2.1 兆円であったのに対し、第 2 期対応後（2011 年 12 月の月中平均）では 0.6 兆円と、大幅に減少しています。



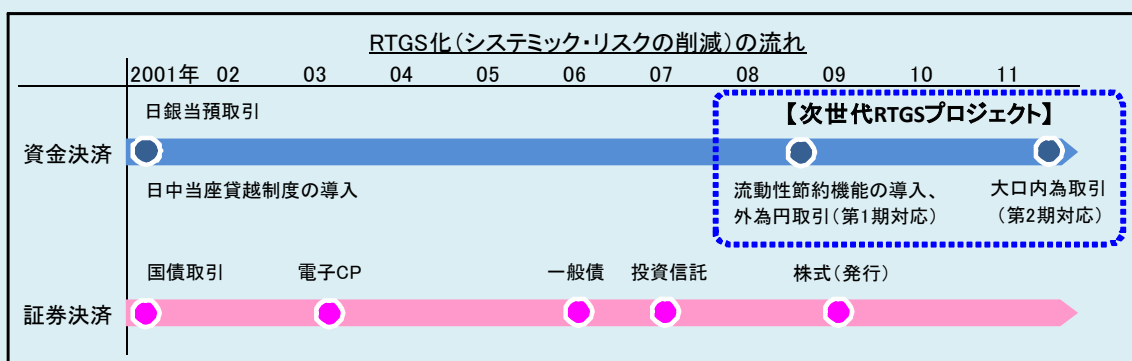
### 【BOX1】大口資金決済のRTGS化の経緯

決済システムは、一つの参加金融機関の決済不履行が、決済のネットワークを通じて、システム全般に波及するリスク（システミック・リスク）を潜在的に持っています。こうしたリスクは、時点ネット決済方式において特に大きなものとなります。このため、日本銀行では決済システムにおけるリスク削減の見地から、2001年、日銀当座預金決済および国債決済をRTGS化しました。また、RTGS化は金融機関の流動性負担を増す性格を有するため、日中当座貸越制度を導入し、日本銀行による日中流動性の提供を開始しました。

こうした下、次世代RTGSプロジェクトでは、RTGSによる決済の安全性を維持しつつ、その効率性を高める観点から、日銀当座預金決済に流動性節約機能を導入しました。そのうえで、民間資金決済システム（外為円決済制度、内為制度）を通じて時点ネット決済方式で処理されていた大口資金決済も、日銀当座預金上でRTGS処理できるようにしました。

この間、証券決済についても、2003年から2009年にかけて、電子CP、一般債、投資信託等の決済が、日銀当座預金のRTGS決済とDVP化されるようになりました。

この結果、銀行間の資金決済から、国債等の証券取引に伴う資金決済、企業間等の大口決済に至るまで、わが国の全ての大口資金決済についてRTGS化が達成されました。



### (2) 時点ネット決済に伴うリスクの削減

1件1億円未満の小口内為取引については、第2期対応後においても、引き続き、時点ネット決済により処理されています。この時点ネット決済について、第2期対応前後の決済金額（決済尻支払行から全銀ネットへの決済金額と、全銀ネットから決済尻受取行への決済金額の合計）を確認すると、第2期対応前（2010年12月の月中平均）では2.2兆円、第2期対応後（2011年12月の月中平均）では0.8兆円となり、大きく減少しています。これは、内為制度全体では、時点ネット決済に伴うリスクが削減されたと捉えることができます。

また、個別行の支払超額の最大額の変化をみると、第2期対応前（2010年12月の月中平均）では0.4兆円であったのに対し、第2期対応後

（2011年12月の月中平均）では0.1兆円と、4分の1程度まで減少しています（注1）。こうしたことから、決済尻不払行が発生した場合に、当日の決済を完了させるために必要な流動性調達額も減少しているものとみられます（注2）。

（注1）ただし、金融機関別にみると、大口分は受取超、小口分は支払超といったように受払が逆転している場合、大口分が抜けることにより支払超額が大きくなることがあります（BOX2参照）。

（注2）不払の額は、破綻等の発生時点に応じて算定されるものですが、ここでは時点ネット決済の決済時点における決済金額をみています。

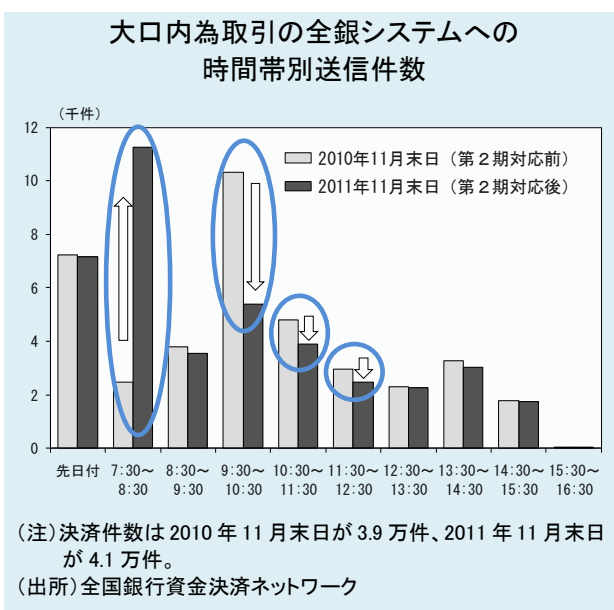
### 3. 大口内為取引の決済進捗

第2期対応では、1時間ルール（大口内為取引を全銀システムに送信し日銀ネットで決済されるまでの所要時間を1時間以内とする）や月末日の早期化ルール（月末日に設定される内為専用時間帯を有効に活用して、決済を早期に進捗させる）といったルールを導入することなどにより、円滑な決済を確保することとしました。

そこで以下では、第2期対応後の最初の月末日となった2011年11月30日について、加盟銀行から全銀システムへの電文の送信状況、全銀システムから日銀ネットへの電文の送信状況、日銀ネットにおける決済状況を確認することとします。

#### (1) 加盟銀行から全銀システムへの送信状況

大口内為取引の加盟銀行から全銀システムへの電文の送信状況を、第2期対応前後で比較すると、第2期対応後では送信が大幅に早期化しています。すなわち、下のグラフのとおり、7:30～8:30における全銀システムへの送信件数が大幅に増加している一方、8:30～12:30における送信件数が概ね同程度減少している姿がみられます。



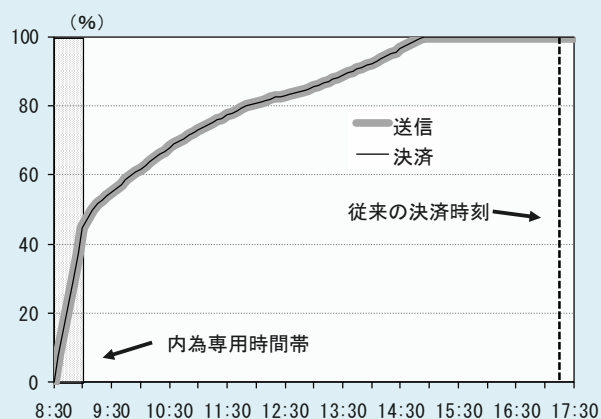
このように大口内為取引の送信ペースが変化した要因としては、時点ネット決済の下で内為制度のリスク管理策として設けられている仕向超過限度による送信制約を受けなくなったためと考えられます。すなわち、第2期対応前では、仕向超過限度に抵触することがないように、一部の加盟銀行が午前中の大口分の送信を抑制していました。また、仕向超過限度額を日中臨時に引き上げる制度がありますが、それが反映されるのは9:30以降のため、それまで電文の送信を待つ場合がありました。第2期対応後は、大口内為取引が仕向超過額管理の対象外となり、早期に送信できるようになったと考えられます。

なお、仕向超過限度額の日中の臨時引上げ額の実績をみると、第2期対応前（2010年11月末日）では1.7兆円であったのに対し、第2期対応後（2011年11月末日）では0.5兆円と、大幅に減少しています。

#### (2) 全銀システムから日銀ネットへの送信状況および日銀ネットにおける決済状況

次に、大口内為取引の全銀システムから日銀ネットへの電文の送信状況と、日銀ネットにおける決済状況を確認します。下のグラフでは、送信と決済の進捗を示していますが、送信と決済の進捗ペースがほぼ重なっています。これは、全銀ネットからの送信を日銀ネットが受信した後、遅滞なく決済されていることを示しています。従来の時点ネット決済の決済時刻は17:15（下のグラフでは右端の点線）でしたので、決済時刻そのものも大幅に早期化しています。また、件数の多い月末日には、日銀ネットの通常の開局時刻（9:00）を前倒しして、大口内為決済専用の時間帯（8:30～9:00）を設けていますが、下のグラフをみると、当該時間帯に急ピッチで決済が進捗しており、同時間帯が有効に活用され、決済の早期化に寄与していることが窺われます。

同時決済口における決済進捗(件数ベース)



(注)2011年11月末日の大口内為取引の送信・決済の累積進捗率。

(出所)日本銀行

このように、大口内為取引の決済は円滑に行われています。この間、大口内為取引と同じ日本銀行の当座勘定(同時決済口)で決済される市場取引や外為円取引についても、引き続き順調に決済が行われています。日本銀行としては、今後とも決済が円滑に行われるよう、決済動向をモニターしていく予定です。

#### 4. 今後の検討課題

##### (1) 内為制度のリスク管理策のあり方の検討

大口内為取引が仕向超過額管理の対象外となったことに伴い、取引の円滑な送信に必要な仕向超過限度額の水準が低下する可能性が考えられます。このため、内為制度を運営する全銀ネットでは、仕向超過限度額の上限について、2012年度上期中を目途に、変更の適否を検討することとしています。

日本銀行では、こうした点も含め、第2期対応後の各種リスク管理策のあり方の検討をサポートしていきたいと考えています。

##### (2) 障害対応策の実効性向上

決済システムを安定的に運営していくためには、策定した障害対応策やリスク管理策の実効性を維持・向上させていく必要があります。全銀ネットおよび加盟銀行では、全銀システムの東京センターが被災した際の対応策を確認

する運用訓練を、日本銀行が実施する日銀ネットの大阪バックアップセンターへの切替訓練と合わせて2012年3月4日に、決済尻不払行が発生した際の処理(流動性供給等)に関する運用訓練を2012年5月20日に、それぞれ実施する予定です。

また、第2期対応に伴って導入した大口内為取引の障害対応策<sup>(注)</sup>についても、全銀ネットおよび加盟銀行における訓練を通じて、実効性を向上させていくことが必要と考えられます。日本銀行としては、こうした訓練の検討・実施について、積極的にサポートしていく予定です。

(注)全銀システムと日銀ネットの間の接続インターフェースが全て途絶するケースへの対応策として、①全銀ネットが日銀ネット端末の機能を利用して大口内為取引のRTGS処理を継続する方法、②全銀システム側で大口分を小口分と合わせて時点ネット決済へ移行する方法、の二つの代替手段を設けています。

#### 5. 照会先

次世代RTGS全般に関するご質問・ご意見等は下記の先までお寄せください。電子メールでご連絡頂く際は、件名の冒頭を「次世代RTGS」としてください。

(照会先)

日本銀行 決済機構局 決済システム課

電子メール post.rtgsexg@boj.or.jp

代表電話 03-3279-1111 内線 2957

## 【BOX2】内為取引に関する資金の流れ

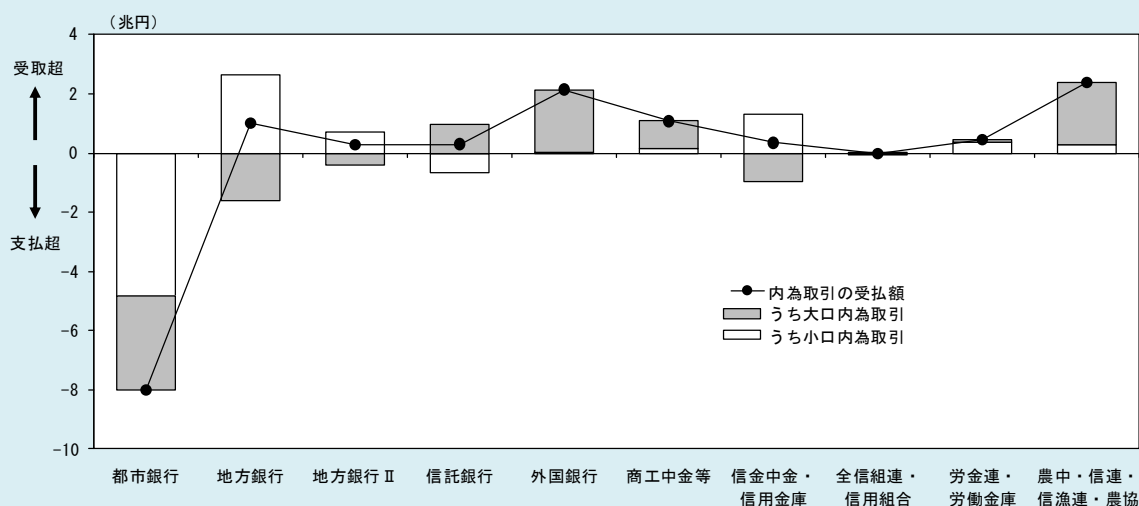
内為取引は、主に顧客（個人・企業）の依頼に基づく他行宛の振込に用いられています。このため、加盟銀行間における内為取引の資金の流れには、各加盟銀行の顧客構成の違いによって、その方向や大きさに特徴的な動きがあります。また、同様に、業態毎にも内為取引の資金の流れにパターンがあります。第2期対応後、こうした動きを大口・小口別に把握できるようになったため、ここでは、2011年12月中のデータをもとに、業態毎の内為取引に関する資金の流れを簡単に確認してみます。

業態毎の資金受払額をみると、都市銀行の支払超が大きく、その他の多くの業態では受取超となっています。これを大口・小口別にみると、大口内為取引では、都銀、地銀の支払超が大きく、小口内為取引では、都銀の支払超が大きくなっています。また、第二地方銀行協会加盟銀行（地銀Ⅱ）、信託銀行、信用金庫をみると全体では受払がバランスしていますが、地銀Ⅱ、信金では大口分が支払超に、信託では小口分が支払超となっています。

こうした点を踏まえると、内為取引の円滑な送信・決済を確保していくためには、大口分については、都銀、地銀における当座勘定（同時決済口）への資金投入を、小口分については、都銀における仕向超過限度額の設定および都銀の仕向超過状況を、それぞれ確認していくことが重要です。また、内為取引の大口分と小口分とでは決済のタイミングが異なることから、受取超・支払超が大口・小口で逆転している地銀Ⅱ、信託、信金における流動性管理も留意が必要です。

なお、以上の結果は、同じ業態内における受払が相殺されているほか、月（四半期末、年度末など）や営業日（五・十日、月末日など）、時間帯（9時直後、午後など）によっても異なり得る点に注意が必要です。

業態毎の内為取引の受払額



(注) 業態は、全国銀行資金決済ネットワークの分類に基づく。

(出所) 全国銀行資金決済ネットワーク

### 〈参考〉次世代 RTGS 関連資料

- 日本銀行決済機構局「次世代 RTGS プロジェクト通信」（創刊号～第 8 号）
- 日本銀行「決済システムレポート 2010-2011（第 1 章第 2 節）」（2011 年 6 月）
- 日本銀行「決済システムレポート 2009（第 3 章第 1 節）」（2010 年 1 月）
- 日本銀行決済機構局「次世代 RTGS 第 1 期対応実施後の決済動向」日銀レビュー 2009-J-4（2009 年 5 月）
- 日本銀行「決済システムレポート 2007-2008（第 2 部第 1 章）」（2008 年 10 月）
- 日本銀行「決済システムレポート 2006（第 2 部第 1 章）」（2007 年 7 月）
- 日本銀行決済機構局「日本銀行当座預金決済の新展開 — 次世代 RTGS 構想の実現に向けて —」日本銀行調査季報（2006 年 9 月）
- 日本銀行「日本銀行当座預金決済における次世代 RTGS の展開 — 関係者のご意見を踏まえて —」（2006 年 2 月）
- 日本銀行「日本銀行当座預金決済における次世代 RTGS の展開」（2005 年 11 月）
- 全国銀行協会「大口決済システムの構築等資金決済システムの再編について」（2005 年 3 月）

（注）上記の日本銀行作成資料は、下記の URL よりご覧になれます。

<http://www.boj.or.jp>